
真夏の昼下がり

遙風 霜鶴渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の昼下がり

【Z-コード】

Z7900E

【作者名】

遙風 霜鶴渡

【あらすじ】

よく晴れた真夏の昼下がり。少女達の和やかな茶会は始まる。『異界アルバム』【魔夏の夜の夢】参加作です。

(前書き)

一応警告カテゴリーを設定しているのですが、あまりグロいと思えるような場面はありません；

それはからつと晴れた夏の日に。南風が海を渡つて来る午後に開かれる。

陽光は空高くから、気分は上々。

風に吹かれるような足取りで、夢見がちな少女達はやつてくる。

気分はどう?

向ひははどうだった?

なんだ、今回は三人だけ?

朗らかに笑う少女は三人。流れるような足取りで、古ぼけた木造建築の一階を目指す。

みしりとも音を立てずに階段を上り、物寂しい一室を目指すのだ。

襖を開けば、畳部屋。積み上げられた古本に、乱雑に並べられた古い蜜柑箱。

青いカーテンは……まあ開きましょう。

持ちよりの紅茶とスープで少女達の秘密のお茶会ははじまる。

わあびしちまじゅう?

誰から話す?

じゃあ、わたしから。

窓から差し伸べられた陽光を受けて、栗色の髪の少女はふんわり笑つて申し出る。

まあ、あなたから?

テーマは覚えていて?

ええ覚えているわ。テーマは夏よ。

少女達のしゃあめきの間を、開かれた窓からの風が流れてゆく。

そうねえ……わたしにとつて『夏』とは恋だわ。一人共ちゃんあんと
聞いているのよ? とつとも素敵なラブロマンス、なんだから……
。

あれはねえ……わたしが三十六歳だった頃。
当時、エステサロンの経営を任せられていて順風満帆の人生を送つて
いたわ。

不景氣だったのに凄いでしょ? それ程『美』に対する女性の欲
望は凄まじかつたつてことよ。

とにかくわたしは日夜、女性を美しくすることばかり考えていたわ。
造顔マッサージから痩身まで、あらゆる術を駆使してナンバーワン
のエステティシャンになろうとしていたの。

……でもね。

そう言葉を切った栗色の髪の少女に、他の一人は顔を寄せる。のんびりと暖かな日差しの中で、まるで猫が丸まるように。

わたしにはライバルが一人いた。そいつは「ことあるごとに、わたしに突っ掛かってきたの。

そのせいで……サロン内で社員達が一分をれちゃって、わたしのライバルが権力を握り出した。

そんな時よ、あの人に会ったのは。

……あの人って言うのはね、桂川健吾さん。有名な美容プロガー主催の小さな集まりで出会ったの。女性誌の編集者さんらしかったわ、男なのによくやるわよね。

でもね、それも頷けたわ。健吾さんはびっくりするくらいの、美丈夫さんだったのだもの。

灰色の硝子玉の様な瞳に銀細工の様な髪。何でも数世代前から国際結婚が続いたとかで……色々な血が混じった結果の、芸術品みた

いな人だつたわ。

一日で恋に落ちて、そうして恋に溺れてしまった。

あんなに大切にしていたサロンも疎かになつて、わたしは夢中で健吾さんとデートしたわあ。

遊園地に喫茶店、高級レストランに夜景の綺麗な小高い丘まで。まるで夢を見ているようだつたのよ？ あれがわたしの最初で最期の恋。

うつとりと手のひらを合わせ、夢見がちに瞳を輝かせる少女を見て、他の一人も真似をする。

ふふ。あの頃は良かった。なんて愛惜しい、馬鹿なわたし。

デートにかまけてサロンを疎かにしているつちに、ライバルは：「あつという間に経営権を剥奪していった。わたしはそれでも良かつたの。けれどね？ そうなつた途端、彼はわたしに会うのを止め

た。

電話もメールも拒否されてね、試しに手紙を送つてみたら、宛先不明で返つて来ちゃつたわ。

でも心配しないで？ わたしは意外な所で、彼を見つけることができたの。

彼も失つた、仕事も危うい。

わたしは何とか、仕事だけは取り戻そつとライバルの自宅へと足を運んだの。

ボロボロの小さなアパートの一つの窓からは……明かりが漏れていた。彼女の部屋は一階だったのに、無用心にカーテンは開かれていた。

覗くつもりはなかつたわ、でも……見えてしまつた。

赤いTシャツを着た健吾さんと緑色のパジャマを着たライバルとが……楽しそうに抱きしめあつている姿が。

それは間違いなく、恋人同士のそれだつたわ。

真夏なのにね……、寒い寒い夜のことだった。凍てついた空ではきらきら星が、冷たくはためいていた。

わたしはね仕方なく、彼を待ち伏せる」とこしたの。

その晩はずうっと出て来なくてね、明ぐる朝やつと、健吾さんは家路に着いたわ。

随分しづら歩いて、電車で三駅過ぎた所で、健吾さんのアパートはあつたの。

健吾さんが部屋に入らうとした所で、わたしは背後から健吾さんにぶつかつて差し上げた。

不意をついた行為だつたし、昨晩仕入れておいた包丁もあつたから、健吾さんは呆気なく玄関に倒してくれたわ。

うめき声をあげる間なんて与えなかつた。わたしは素早く健吾さんの喉を二つに裂いてあげたんだから。

多少切るのが難しかつたけどね。そのあとひやんと切断してあげたのよ。

血が滴つて、美しい生首の出来上がり。

わたしはそれを冷凍庫保存してね、一生一緒に暮らしてあげたの。

一人の少女は顔を見合せ、快活そうな少女の方が白い手を挙げて名

さあ、お次は誰かしら?

頬をつねりあつてはしゃぐ一人の少女に、栗色の髪の少女が満足そうに笑つて質問する。

何言つてんのよ、ハッピーハンドが一番じやない。

まあ素敵。でも痛かったのじやないかしら?

うつとり話しを終えた少女に他の一人は感嘆を漏らす。

乗りをあげる。

次は、あたしの番よ。

あたしことつて夏つてこつのは……これ。

やつまつて少女は室内に飾つてある、場違いな一枚の油絵を指差す。

薦模様の丁寧な額縁の中には、淡いパステルカラーの草原が描かれている。草原の真ん中には広い未舗装のなだらかな道が延びていて、その道の向こうには、白い帽子に青いワンピースのお人形の様な少女がたつている。

あれが、どうしたつてこつのは？

一人の少女のさざめきに頷いて、快活な少女は嬉しそうに笑う。

この絵、この絵はね、聞いて驚かないでね？ あたしのおばあ様を描いた絵なのよ。

おばあ様は戦前、何処かの小高い森で迷われたそうなのだけれど……その迷い込んだ森を抜けると、こんな草原が広がっていたらしいの。

赤とも白とも黄色とも……なんとも言えない淡く朧気なその草原を、おばあ様は大層気にいつたらしくてね。迷い子になったのも忘れて、何処までも歩いて見ようと……思つたのですって。

風が気持ちよくて、夏の様にすつきり晴れた空に……春の様な雲が浮かんでいる。

あまりにも気持ちが良くて、どんどんどんどん先へ進んでいったんですって。

けれど歩いても歩いても景色は移るわない。誰も居ないので、なんだか視線まで感じる。

おばあ様の胸の中では、次第に奇妙な違和感の様なものがトグロをまきはじめた。

何かおかしい。

何がおかしいんだろう……。

そして、気付いたの。

空に太陽が無いこと。

まさかそんなはずあるわけない、そう思つわよね？ でもどこを探しても、太陽なんて……光源なんて……一つも見つからなかつたんですって。

おばあ様は急に氣味が悪くなつて、来た道を引き返そつとした。

でもその瞬間『誰か』に呼ばれたんですつて。

見ると誰もいなかつた筈の場所に、その『誰か』が立つていて、おばあ様にこの絵を微笑んで差し出したつていつのよ。

微笑んで、というのは覚えているのに『誰か』がどんな風貌の人だつたかは全く覚えていないんですつて。

ただ画家だつたんぢやないかしら…………つて言つてらしたわ。

そうして絵を受け取るとね？何故か自分の御屋敷の前に立つていたんですつて。

おばあ様は今も元氣で暮らしているけれど……その出来事だけは忘れられないつておっしゃるわ。

オマケにね？ おばあ様が迷われた森は、空襲で焼け野原になつた……つてオチまでつくるのよ。

まあこつわい。

あら、メルヘンで素敵じやない。

あたしもやつと思つわ。

開かれたカーテンの裾を風が玩ぶ。

少女達が暫くわざめきあつたのち、最後の一人、……一番背の低い少女の話しが始まる。

夏、あたしの夏はねえ……約束よ。

約束？

何よそれ？

栗色の髪の少女と快活そつな少女は、疑問符を浮かべて顔を見合せる。

ふふふ。あついあつい夜だつた。あたしはねえ、花火大会の帰り道で、夜道の心細さなんて忘れていたわ。

お酒も入つていたから、多少ハイになつていて……自分が何処を歩いていいのかさえ、その内分からなくなつていつたの。

下着でいたつて汗ばむよつな夜よ？ 浴衣はとつてもむし暑くて……あたしはだらしなく、下駄を壊しそうなくらいに鳴らして歩いていたの。

そしたらね、ふよふよ……つて。なんだか急に……体が軽くなつたのよ。

ああ飲み過ぎちゃつたかしら？ そう思つて下を向いたら……眼下にはすっかり遠退いた街並み。

焦つたわ。

そういうばさつきから下駄の音が聞こえなくなつていた……どうして早く気がつかなかつたかしら、つて。

酔いの回った頭で必死に降りる方法を考えた。その間にも、あたしの体は何かに引っ張りあげられるように容赦なく高度をあげる。

あたしは仕方なく身を任せて、夜風に吹かれているしかなかつた。

そしたらね？ 突然ぱあつて、目の前が真っ白になつたの。白くてまるいふわつとした……そうね、例えるなら海月。^月まばゆいばかりに輝く、海月の様な発光体がね？ 大きく口を開いて……あたしを飲み込んだの。

まあ恐ろしい。

いやだ、じゃあ貴方は何？

一人の少女は震え上がりて互いに抱き合つ。一番背の低い少女は、面白そうに笑つて話しが続ける。

まあまあ、一人とも落ち着いて、続きをお聞きなさいって。

気がつくとあたしは、柔らかな光の中に居た。とってもとってもまぶしいのだけれど……不思議と目は普通に開けられた。……なんて言うのかしら? 目の前をガーゼで覆われている感じ? ……いえ、それもちよつと違つわねえ。

……とにかく……あたしはそこに居て、何故か『誰か』を待つていたの。

どのくらいか経つた時、光の中人に人の気配を感じた。眩しくて人影ぐらいしか見えなかつたんだけれど……その姿が現れた途端、目の奥がじんわりとしてね。泣き出してしまつたのよ。

『お帰りなさい』

ポロリとそんな言葉が零れたわ。何だか胸が締め付けられて……懐かしいような気持ちでいっぱいになつたの。

ああ帰れる、これで帰れる。あたしはとっても嬉しかった……嬉しかったのだけれど……やっぱり帰れなかつた。

「の屋へ、」の地上へ……大切なモノが沢山出来すぎていたからね。

そんなんあたしの気持ちを察したのか、その『誰か』はあたしに「いつ言ったの。

『また会おう……必ず迎えに来るよ』

女性みたいな男性みたいな、低くて澄んだ耳障りの良い声だつたわ。あたしは悲しくて……あまりにも悲しくて。蝶を象つた髪飾りを差し上げる」とこしたの。

翌朝田覚めると、あたしはひやあんとベッドの上に横たわっていたわ。

夢だったのかしらって、残念だったけれど……でも……髪飾りはなくなつていきました。

あつとあれは夢なんかじゃないわ。

そつよ、だつてあれからですもの。不可思議なものが見える様になつたのは。

不可思議とは？

快活そうな少女が怖いモノ聞いたわと口を開く。

だが残念なことに……背の低い少女はにんまりするだけだ。

さて姫様、本田も素晴らしい御話をあつがうござります。

栗色の髪の少女が両手を広げて一人を称える。

ええ本當に、素晴らしいしかつたわ。

快活そうな少女もそれに続ぐ。

ええ、ええ。それはもう。持ち寄り話しさ終わつたことですし、紅茶をいただいてお開きに致しましょ。

背の低い少女が、スコーンを片手にそつ頷いた。

明るい午後の光の中で、絵画の様な少女達。爽やかな風にくすぐられながら真夏の茶会は盛りを迎える。

緑の匂いを孕んだ風に、ためらいがちな蝉の声。

真つ青な空に覆われた命は、短く強く……今を歌つ。

ダンダンダン。

階段を『誰か』が登つてくる音がした。

まあ。

そうよ、あたし達が『夏』だったんじゃない。

あら、嫌だわ。あたし達。

いいえ怖がることはない。風がチリンと風鈴を鳴らす。……それが田代の合図だから。
そして……少女達は夢から醒めるのだ。

少女達は互いに肩を抱く。

きつちり閉めてある襖^{ふすま}の外には、しつかりと何者かが立っている気が配がする。

三人は、紅茶を片手に眉をひそめる。

まあ。

まあ。

すっかり忘れてた。

チリンともう一度風鈴が鳴る。少女達は夏風に溶けてしまつて、畳
部屋は静けさを取り戻した。

「ひょいとお！ あれ？」

先程まではびくともしなかつた襖が開いた。馬鹿みたいにかたかつ
たのに、いつも通りにスルスル開く。

「可笑しいな……？」

地味なショルダーバッグを掛けた、一昔前の学生の様な青年は、首を捻りながらも畳に腰を下ろす。

ねつこうがると、風が心地よい。

「つて窓開けっぱなしだつたけ？ 物騒だな」

独りじちながり空を眺める。もくもく膨らんだ重たそつな雲が、ぱいぱい影を落としたりしては過ぎてこぐ。

『普段は開く筈の扉が、暫く開かないようだつたら……待つてやりなさい。それは”夏”が遊びに来ている証拠だからね？ もう暫く待てば、ひやあんと開くから』

婆さんが、よく言つてたつけなあ。

流れる雲を眺めていると途方もなことを思い出す。

「そんなわけないって……」

眩しい日差しをその身に受けながら、青年は大きく伸びをする。

さて、一眠りするかな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7900e/>

真夏の昼下がり

2010年10月29日02時21分発行